

〈2018年度博物館特別展〉

「飛騨真宗の伝流—照蓮寺高山移転430年—」開催によせて

博物館主事 学芸員 講師 川端泰幸
(日本中世史)

大谷大学博物館では例年、10月から11月にかけて特別展を開催している。昨年、2018年度は「飛騨真宗の伝流—照蓮寺高山移転430年—」を、10月12日(金)から11月28日(水)まで、高山別院照蓮寺、および高山教区の秋聲寺・照蓮寺(以後、こちらの照蓮寺を通称にしたがい城山照蓮寺と表記する)・東等寺・長圓寺・不遠寺・了徳寺など、多数の大谷派寺院の協力を得て開催した。

大谷大学博物館では、2010年から2012年の3年間をかけて開催した宗祖親鸞聖人七百五十回忌御遠忌記念展で宗祖親鸞の足跡を辿り、さらに2015・2016年の2年間では、本願寺中興蓮如の生涯やその教えに注目した展示をおこなった。そのような流れのうえに、親鸞や蓮如の教えが地域社会にいかに関与したのかに注目して、2018年度の展示が企画されたのである。

折しもこの年は、照蓮寺が高山藩主金森氏の招きで高山城下へ移転した年から430年目の節目となることもあり、飛騨真宗の伝流をたずねることとした。「世界遺産ひだ白川郷」として有名な飛騨地方には、今もなお真宗信仰が深く根づいているが、その起源は、鎌倉時代、親鸞の門弟であった嘉念坊善俊が白川郷鳩ヶ谷に草創した道場にある。善俊の流れをくむ門弟集団は、室町・戦国時代に本願寺第8代蓮如に帰依し、さらに教えがひろまっていくこととなったのである。

展示会は、第1章「飛騨真宗の開闢—親

鸞聖人と嘉念坊善俊—」、第2章「蓮如上人と照蓮寺」、第3章「照蓮寺の近世」という3つの章で構成し、その起源から近世までの歴史的展開を取り上げることとし、照蓮寺に伝わる聖教や絵画類、さらに照蓮寺とともに歴史を歩んできた高山教区の寺院所蔵の法宝物類など38点を展示した。

第1章では、謎の多い嘉念坊善俊にまつわる作品や由緒、照蓮寺の歴史を語る法宝物などを展示した。嘉念坊善俊については、展示された歴史書『岷江記』などによると、越後浄興寺の開基善性の息子、あるいは後鳥羽上皇の第2皇子であったが、ゆえあって伊豆三島に流罪となり、関東から帰洛する親鸞聖人と箱根で出遇ったことがきっかけで門弟となったと伝えられているが、皇胤説などについては確証が得られない。ただし、善俊の流れをひく集団は室町期において「白川善俊門徒」と呼ばれており、善俊教団ともいえるべき集団があったことは確実のようである。また照蓮寺には、十字名号と九字名号の名号本尊が伝わっている。これも今特別展では注目すべき作品であった。とくに九字名号については、もとは

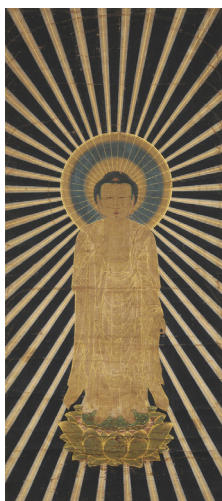


九字名号
(高山別院照蓮寺蔵)

名号の他に釈迦如来・阿弥陀如来・浄土真宗の先徳たちを描く光明本尊と呼ばれるものであったことがわかっている。現在は、蓮台の上に「南无不可思議光如来」の名号が金泥双鉤填墨（籠文字）で記され、周囲に光明が描かれているかたちであるが、よく見ると左右に浄土真宗の先徳や釈迦・阿弥陀が描かれていた痕跡がある。こうした名号は初期真宗の荒木・高田・佛光寺などの教団でよく用いられたもので、照蓮寺の起源を語る重要な作品である。

第2章では、戦国期の照蓮寺の歴史について取り上げた。秋聲寺蔵の方便法身尊像（阿弥陀如来画像）は、裏書から、文明18年(1486)に蓮如が白川善俊門徒飛驒国大野郡河上庄萩野の慶空に授与したものであることがわかる。岐阜県下にはこの他にも「善俊門徒」宛の方便法身尊像が8幅存在しており、「蓮如9幅」と呼ばれている。このことから、蓮如期に白川善俊門徒集団がこぞって本願寺教団に参入したことが明らかになるのである。この他にも飛驒には蓮如の六字名号などが多数伝えられており、戦国期において中部山村社会に本願寺教団が急速に浸透していった様子が見えてくる。

そして、第3章では近世における照蓮寺の諸相を紹介した。戦国期をつうじて照蓮寺をはじめとする飛驒の僧俗集団は本願寺を支える重要な基盤となっていた。またとくに織田信長との石山合戦前後には、後に東本願寺を創立することになる東本願寺第12代教如



方便法身尊像
(秋聲寺蔵)



親鸞聖人絵伝（第1幅）
(高山別院照蓮寺蔵)

を支援し、東本願寺教団の地域における母体ともなった。そのことを示すのが、照蓮寺蔵の親鸞聖人絵伝で、有名な狩野派の絵師狩野山楽(1559～1635)筆とされるものである。この作品には慶長4年(1599)に教如が修補したとの裏書が付されており、山楽筆ではなく、山楽が修補時に手を加えた可能性があるという指摘されている。また、狩野山楽との関係では、伝狩野山楽筆の松鷲猿画金屏風も展示したが、教如と狩野派、そして地域教団との関係を示す新たな研究課題が浮かび上がってきたといえる。

以上のように、これまで存在は知られていても、調査・研究が十分には進んでいなかった地域教団の歴史と文化について、今回の展覧会では紹介することができた。なお、会期中には全国の門信徒の皆さまをはじめ、飛驒出身で現在は京都に住んでいるという方々など、多くの観覧者にご来館いただき、真宗文化の魅力を一端でも感じただけなのではないかと思う。